

遠と旅 足と行

四月六日 文科四年(但此時は未だ三年半)地理選修の者六名は、西村先生に御願ひして、鎌倉から江の島の方へ、連れて行つていた、きました。ほかほかさす春の日、試験のすんだあつた、ノートは未だからつぽ。圓覺寺に禪の滋味

を味つてから、鶴ヶ岡八幡宮の前に出ました、左手の梅の林が丁度盛りでした、曰く「左膝をまげ足を前に出し体を前に倒せの様ですれ」つて、本當に。頼朝公御幼少の折の云々、さ云ふ事をも誰か云ひ出して又ふき出しました、それから由井ヶ濱邊のさすらひあるき、打ち寄せる波のメロデー、自分等の心さが何所かで一所になつて、薄い霞の中で渦を巻いて美しく歌ひ合つて居る様に思はれました、江の島では「かき」の御馳走になりました、高い所から眼下に稚兒ヶ淵を見ながら、遙かに目を地平線上に移した時に……「何て私達は幸福なのでせう！」貝の指輪も御座います、貝のボタンは如何でございますか、筆立てかんざし色々ございます、よつていらつじやい」長い出女の赤前垂の行列と、この浴せ掛けにはふき出さるを得ませんでした。こゝらの人の算術は「人は金」といふのでせうと誰やらの聲、遊行寺から藤澤の驛に出て歸つたのは八時頃、片瀬頭で小さな會に移りました。

五月五日 文科三年 國府臺に遠足す、同行十一人、岡の上の眺望に市川土堤の道邊に、心行く迄春の郊外の趣を吸収して歸りました。

四月二十一日 四年 舊級主任佐藤先生と廿人ばかりで、田島ヶ原に行く、櫻草を目がけて行つたのに大きな制札。けれど目をさへ

の松桃園に松風をきながらのまこひも、静かて嬉しく御座いました。

佐藤先生
こよ子

世を渡る道もかくこそたのしさにそぞろ心のまゝのつぎはし

松風の音に心をすましてそほ、えむ乙女のしろつばきかな
きみ子

母人を朝まだきより騒がして來ぬれど友のみえぬぞかなしき
しな子

馬にのつてかけてみたく心地しぬかつしかの原青あらしふく
潤子

野の人に道さふ君のうしろかげものがたりめき美しきかな
四月二十九日 文一 戸田ヶ原へ 朝からの烈しい風の中を、文一の内の十六人は、河崎先生に御つれいたなき、他に先生の御連れの方の十二三人と御一緒に、戸田が原へ参りました、原の一隅に輪を描いて座つた二十五人は、先生の御話を伺つたり、眼を閉ぢてじつと風の音に聞き入つたり、思ひ思ひに摘み草したり、楽しい、そして意義のある幾時間かを送る事が出来ました。

風の日、に始めての遠足をした思ひ出に、銘々が三束づ、持ちかへつた櫻草が、花の寮の庭に植えてあります。

五月三十一日 文二 目黒へ 強めてのお願ひをきいて下すつた垣内先生と、二十人ばかりで青葉の目黒を訪ひました。折からの雨に兒童樂園の講堂にふりこめられて、はからずも食養法の御話を

ぎるもの、一つない廣野原に坐はつて、物語るこゝは限りなく嬉しかった、天も地もすべてがあなを、そして人々の心も青春の歡びにみちて居た、埼玉女子師範で御馳走になつて歸つたのは八時一寸すぎ。(文四の一人)

四月二十一日 文二地理部 西村先生をこめて、十人のグループが、綾瀬堤の長閑さに、心ゆく迄話してゐました、なげ出した足の邊り、真菰はもうのび揃つてゐて、豊かに水がざりまいてゐます。遙か向ふを荒川行の河蒸汽が、花見の人を満載して通ふのを、遠い世のもの、様にも考へてゐた程しみじみした半日でございました。

四月二十三日 文四地理部 江の島の御禮に伺ひました所、直ぐに此の相談がまごまりました、場所は日野からもぐさ園と、けれど共六の朝生憎小雨が降りましたので、ためらつて居りました所が、先生が態々舎へ御出で下さいまして、押上から電車で江戸川堤へお花見にまゐる事になりました。同行七人、何所でも奇妙な假裝行列を見受けまして、議論が澤山出ました、押上までの電車さへ凡そ三十分も待たなくてはなりません、それさへ分け乗りで、この先の電車といつたらもう言語道斷、漸くのり込んだ頃から、又雨が

ボツ／＼ふりましたので、私共が帝釋天から江戸川堤の花の下にまゐりました時は、全く天地と我々同行のみさなりました。只所々に辛抱強い茶店のおばあさんが、毛布にくるまつていました許り、しみじみと天地の氣を身にうけて歸りました。

四月二十九日 文二 逝く春をおふて中山から國府臺にかけて歩きました。風のとよい日で御座いましたけれど、若緑にまじつた八重櫻のながめが、どこでも私たちをはぐくむてくれました。八幡

きいてまゐりました。標本室にはおもしろい人形が澤山御座いました。夕方になつても止みませんでしたので、ぬかるみの中を不動様へだけまゐりました。雨にげぶつた目黒は蛙がいないので、何となくつかしう御座いました。さもなくも放課後からさしては、割合よい計畫であつたと思つて居ります。

箱根旅行

五月十五日 文二 明るい朝の光は昨夜までの雨に濡れた若葉と、美しい楽しみに緊張して居る私共の心に流れて居ります。

下村先生、西村先生、御引率の下に午前六時五十分、東京驛を發して横須賀に行き、軍艦山城と造船所の様子を見、午後一時五十六分に鎌倉に向つて立ちました。葉櫻頃の古蹟の地は、静かでございます、尋ね行く寺々は當時の氣風をしのばせました。

七里が濱の夕ぐれを、電車の窓から眺めて片瀬につき、長い棧橋を渡つて、夜の江の島に参りました、海は忘れ得ぬまでと、始終なつかしい波音を立て、居りました。

五月十六日 地理選修の者九名がこの朝早く、西